

整理・整頓・ファイリング： 個人の蔵書管理と読書記録

Tidying up, orderliness and filing systems:
how to manage personal collection and reading notes

HAYASHI, Tetsuya

林 哲 也

短期大学部図書館学課程非常勤講師

抄録：

整理整頓の基本は捨てることにある。在宅勤務／リモートワークの新時代に対応すべく、職場と住居の文書整理を日常生活の物品管理と共通の原理コンセプトで律する方法を考えてみる。また、図書館で働く者の一員としての観点から、本を読む前に／読みながら／読んだ後の作業として推奨する事項も挙げておく。

Summary：

The basis of tidying up is to throw it away. Responding to the new era of teleworking or remote work, we examine how to regulate document organization at both the workplace and residence using the same principle as that of goods management in daily life. Further, from the perspective of being a member of library workers, we intend to recommend some tasks before, while, and after reading a book.

キーワード：文書管理、ファイリング、蔵書管理、読書、事務管理、ビジネスマナー、ホーム
ファイリング、収納、家政

Keywords：Records management, Filing systems, Collection management, Reading, Office management, Business etiquette, Home filing system, Storage, Housekeeping

1. はじめに

2020年春以来、新型コロナウイルス COVID-19 感染拡大防止のため在宅勤務、テレワーク、

リモート授業が推奨され実現普及してきた。文書管理や自宅の片づけなどについては、さまざまな手引書が従来から多数刊行されている。けれども、日本十進分類法 (NDC) 336.55 のビジネス書と 597.5 のお片づけ本がそれぞれのジャンル毎に別々に論じられており、職場と住居に一元的な共通の原理コンセプトを適用／開発する視点はあまり見当たらない。けれども我々は、給与や福利厚生をはじめ庶務的な届出書類を職場でやりとりしているのみならず、仕事で業務上の文書を扱う際も、生身の人間として私的領域で習得してきた知識や技能スキルも活用しているはずである。日常生活の中で文書および物品を片づける方法をこの機会にあらためて考えてみる。

2. 整理・整頓・ファイリング

我々は今まさに非常な危機の只中にいる。職場の文書を自宅に持ち帰る機会が増えている。これに伴い、紛失や情報漏洩のリスクが高まっている¹⁾。自宅／家庭内の文書管理は大丈夫だろうか。極めて危うい状況になっている現実を真剣に認識し、対策する必要がある。

ある日突然、隔離対象者になって何日も出勤／登校できなくなることも、自分自身の身に実際に起こりうる現実の可能性として想定しておく必要がある。運が悪ければそのまま帰らぬ人となるかもしれない。必要な文書を自身の不在時にも周囲の人たちがみつけれられるように、あらかじめ備えておきたい。

管理対象の量をまず減らし、然る後に整頓に着手する。不要なものを適時に捨てておかないと、必要なものがゴミやガラクタに埋もれて見つからなくなる。「整理の要諦が「捨てる」ことにあるのは、明らかである」²⁾。

捨てる作業を実行する際は、捨ててはいけなものを安全確実に保管する場所を、まず最初にしっかり確保しておくこと。捨てるつもりではなかったものを誤って捨ててしまっは大変だ。私は常に愚かであり、同じ失敗を何度でも繰り返している。なかなか理論どおりには実践できない。少し気を緩めただけでなんととても簡単に机の上は散らかってしまうことか。重要書類だ、失くしたら大変、と意識するあまり、特別な場所に大事に収納したつもりが往々にして、どこにしまったかを思い出せなくなり行方不明に。ついでしたが手渡されたばかりの文書をひょいどこかに載せて、はてどこに置いたのやら見失ってしまうこともしばしば。整理整頓できないままではと重大深刻な災いを自らに招く。周りの人たちにも多大の迷惑をおよぼしてしまう。

文書であれ物品であれ、たくさんの量を手許に保持して支障を生じないのは、管理能力に優れたキャパシティの大きな人だけである。管理能力の容量の小さい私は、だからこそそれだけ一層、常人に増して人一倍、自分の手許の文書のスリム化減量ダイエットを意識的に心掛けて励み続けなければいけない。体質的に病弱な人、もともと胃腸が弱い人は、暴飲暴食すべからず。整理下手を自身の弱点として素直に自覚し、それでもかろうじてなんとかしのいでいくための対策の備えをする。「誰にでも「管理できる量」があり、その範囲内で維持すれば整理上手への道が開けるといふこと。整理整頓がどんなに下手であっても、持っている書類やモノの量を減らしていけば、管理できる量に行き着きます。」³⁾

汚部屋⁴⁾・ゴミ屋敷⁵⁾を脱出した人が、ほどほどのところでとどまることができず、極端なミニマリストになってしまう場合があるらしい。心情的に実感としてとても良くわかる。捨てるだけならばなんとか実行できて、生活習慣を改め体質を改善し几帳面に整頓できる人に変身することはとても無理。管理対象すなわち散らかるモノ自体をいっそのこと大胆に思い切って捨てて消し去ってしまえば、管理能力のキャパシティが増えていないままの私でも、散らかっていない状態が実現する。捨てることによる多少の不便や、取っておけば良かった、判断を誤ったという失敗はときどきあっても、混沌カオス状態から生じる実害に較べたら、身軽になる快適さのメリットの方が遥かに大きい。

整理整頓には捨てる勇気が要る。大いなる決断力、実行力、エネルギーも必要。「捨てるのはいつでも捨てられる」と称して捨てることを先送りしてしまう人は多い。溜まっていた不要文書を捨てる得難い大きなチャンスだったはずの異動／引っ越しの機会に、あのときあともう少しだけ勇気を出していたら良かったものを、と悔やむことが何度もあった。

事務机は、仕事をするための作業スペースとして職場から貸与されている備品である。私物の物置ではない。

「事務机の引出しから私物がでてきておどろいた」と、ファイルのコンサルタントがよくいっています。とんでもないことだ、やっぱりそうか、という両方の気持ちでいっているようです。⁶⁾

「一般に管理職といわれる人たちの身边は、スッキリしているものです。この理由のひとつは、経験によって、情報の質と重要性を見抜く力が、部下に比べすぐれているからだと思います。」⁷⁾

「取引先の担当者、電話番号、メールアドレスなどは、やはり心して管理すべき個人情報である。ましてや取引の内容がわかるような書類ともなれば、部外者の目に触れないように確実にしまっておく必要がある。」⁸⁾

事務机の引出しはあらかじめ空にしておくよう習慣付けておけば、机上に展開した仕掛かり仕事を、短時間の離席の際でも瞬時にサッと収納することができるはず、と理屈では承知していても、なかなか動作行動がついていかない。退勤時に文書を散らかしたまま帰宅するのは、生鮮食料品をすぐに冷蔵庫に入れないで出しっ放しにするのと同然。冷蔵庫にはあらかじめ、必要十分な空きスペースを確保しておく。文書も、直ちに適切なファイル先へ繰り込まないと、冷蔵庫に収まりきらずにはみ出した食材と同様に、駄目になってしまう。生ものはたちまち傷み始める。冷凍食品が溶けたら取り返しがつかない。

住居／家庭内での日用品の片づけも原理は共通。外出やトイレの後には手を洗う。歯磨きと机回りの片づけは毎日する。リビングのテーブルの上も職場の事務机も、最低限1日1回は布で拭き掃除できる状態にする。翌日またすぐに続けて使うからと、仕掛かり仕事を畳まずに広げて散らかしたまま放置するのは、敷きっ放しの万年床のようなもの。

目の前にある乱雑状態をひとまずトントントンと外見上だけ整える作業ならば、さほど難しくはない。けれども「要るものを使いやすい場所にきちんと置くこと」⁹⁾という「整頓」になって

いないので、すぐにまた散らかってしまう。

「5Sとは整理・整頓・清掃・清潔・しつけ、5つの頭文字を取って名づけたものです。もともとは工場などの生産現場で始まりましたが、高収益を生む企業体質を作った代表例は、世界に誇るトヨタ自動車です。」¹⁰⁾

「せっかくデスクの上に乱雑に積み上がっていた不要な書類を処分しても、書類を整頓するための方法やルールがなければ、また不要な書類であふれかえってしまいます。」¹¹⁾

「『超』整理法による時間軸配列を採用しないかぎり漂泊書類または「家なき子書類」は避けられない。たぶん、これに対するあなたの解決策は一般フォルダー (general) または雑フォルダー (miscellaneous) をつくることである。そして限らない一般フォルダーの肥大化を呼びこみ、検索するのがいやになるという状態をあなたはつくりだす。」¹²⁾

「残すべきか捨てるべきかを考える時に大切なのは、「とりあえず残す」という曖昧な判断を極力なくすことです。」¹³⁾

「よく片づけの本などにも「一時置きのかごを作しましょう」と書いてあるが、片づけが苦手な人はこれを言葉通り受け取って次々と一時置きのかごを増やしてしまい、結局どこに何があるのかわからなくなってしまう。また、一時置きのかごや箱はあくまでも「一時的」な場所なので、定期的の中を空にしないと意味がなくなる。」¹⁴⁾

進行中の仕掛かり仕事、分類仕分けがすぐにできなかった雑件ファイル、判断を保留先送り後回しにした未決定文書。それらをとりあえず¹⁵⁾ 仮置きのままにすることはやむをえない必要悪だが、これこそが理屈どおりに片付かなくなる破綻の元凶。たちまち混沌が増殖し溢れ出て決壊する。

新たに受け取る新規文書をどこに格納するかが大問題の難問課題。いちいち迷って考え込まずに振り分けられるような仕掛けを工夫して備える。固有名詞 (人名／部署名／相手先の機関団体の名称など) による見出し (ラベル) を付ける。名前による振り分けが困難な場合は、件名によるラベリングも (次善の策としては) 採りうる選択肢である。

「ちなみに、特にやりがちな、しかし絶対にやめたほうがいいNGネームナンバーワンは、「その他」です。判断基準が曖昧なので、何が入っているのかわからないブラックボックスと化し、あとで探せなくなります。」¹⁶⁾

部署で共有する業務文書だけならば、職場で所定の手順に素直に従えば、きちんとファイリングできる。しっかりしたバインダーに綴じて背文字を明記する。他方、共有に適しない、個人が管理する属人的なパーソナルファイルの整理方法は、未解決のまま残ってしまった。共有ファイルとパーソナルファイルを混在させたままでは破綻する。異動の際に特定個人が座席の移動と共に連れて行く属人的な参考資料やメモの類は、共有ファイルからあらかじめ明確に切り分け、分離しておきたい。私は、ありあわせの透明ポリ袋に収納している。見出しを大きな文字で紙にプリントして、各袋内の先頭に看板／表紙として配置する。とじしろのない印刷物も多いので、穴を空けてバインダーに綴じることがしていない。研修会や会議／打ち合せの配布資料、雑誌記事 (論文の抜刷、文献複写)¹⁷⁾、イベント (講演会・展覧会・演奏会等々) のチラシ／パンフレッ

トなどの紙資料の現物管理。業務上の文書に限らず、単なる教養娯楽として読む図書からの抜き書きメモ、日常生活や趣味に関わる文書も同様の原理で物品管理している。

3. 本の読み方をめぐって

読書論・読書術の手引書は昔から数多く刊行されている。けれども、統計やアンケート、対照実験¹⁸⁾などを論拠に効果効能を検証したり、因果関係を実証的に示したりすることもなしに、漠然とした主観的な信念や印象だけに基づいているものが大部分である。読書のすばらしさを他人にも勧めたい人、大学の先生、研究者、ジャーナリスト、読書好きを自負する自信満々の人、個人で何万冊も本を所有している人や、書評の連載の締め切りを毎週持っているプロのライターが「こうしなさい」と命令形で主張し勧めている方法を、普通の人が真に受けてその通り実行したら身の丈に合わない過剰投資になる。誤解に基づく意見や、実害を生じる賛同し難い主張／勧めも見受けられる。図書館で働く者の立場から補足しておきたい事項がいくつかある。本稿も筆者の個人的な限られた範囲での体験に基づく、客観性に不足のある事例報告に過ぎない点では同じ穴の貉ではあるのだが。

3.1 持続可能な循環型の読書生活

「図書館で本を借りないこと」「タダは所詮タダのものでしかないからです。自分の懐^{ふところ}を痛めて購入するからこそ、血となり骨となるのです。」¹⁹⁾、「自分で買わない読書は、第一に、身につかない。」「ただで本を読もうという人には、本の有難味がわからない。」²⁰⁾という意見もあるが、「一般的には、必ずしも自分で買った本でなければ内容が身につかないということはない。要はそれを読む本人しだいである」²¹⁾。書店で普通に市販されている図書は、出版物全体のうちのごく限られたわずかな部分に過ぎない。他方、図書館を経由すれば、非売品や絶版書籍も含めてたいていのものは読むことができる。

図書館で借りた本は、期待したような内容ではなかったときは、自分で購入した場合よりも早目に見切りを付けて気軽に中途放棄し易く、かつ、損失感がなくて精神衛生上とてもよい。²²⁾購入して自己の所有物とし、いつでも読めると安心してそのまま読まずに放置するよりも、限られた期限内に返却しなければならず原本は手元に残せないものの方が、より真剣にこころして向き合い、必要な箇所はメモをとって記録する動機付けが得られる。「返却期限という締め切りは、図書館のメリットなのだ」²³⁾。早期に読み了えるよう圧力をかけてくれる。人が何事かを完遂できるのは締切があればこそで、期限がなければ易きに流れるのは人の常。つい怠けてしまい、いつまで経っても何も完成しないまま無為に時を過ごしてしまう。

私物に限定してならば、入浴中の読書²⁴⁾ ²⁵⁾ ²⁶⁾ ²⁷⁾ や、図書自体に直接線引き書き込み²⁸⁾してノートのように使ってしまうことも、各人の趣味嗜好しだいではある。けれども印刷物は文化財としての価値があるので、故意に汚損・破壊しないことを強く推奨する。雑誌は必要なページだけ破り取って保管²⁹⁾することも可能だが、それで得られるスペースの節減効果もさほど大きく

はないし、時代背景を反映している広告その他のせっかくのコンテキストも失われてしまう。同じ号にたまたま載っていた別の記事が後日思いがけず役立つ場合もある。

「自己資金で買った私有物だから、何をしてもよいではないかという考えではなく」「自分がこの本の最終所有者ではない」という自覚をもつべきだと思う³⁰⁾、「どんな本でもいずれ手放すと意識をして扱う」³¹⁾、「本というものは次の人に受け渡すものだと考えています。自分の書き込みなどなく、次の持ち主に受け渡したいと」³²⁾。

図書の現物原本を汚損せず、最初から別媒体つまりノートやカードに抜き書きする。本をただ読むだけでそれきり何もしないよりも、手を動かして何か書いた方が身に付く、ということがもし仮に真だとしても、書き込み先の媒体を図書原本そのものに直接、と決めつけることはあまりにも短絡、合理的な必然性がないと思う。手を動かしさえすれば記憶に定着し覚えられるというものでもないことは、たとえば講演会の音声記録を文字起こしして全文タイプライトしても内容をまるきり記憶していない自分自身の体験からも実感している。

葉は短冊状の白紙を使用する。付箋やポストイットは、粘着剤が紙に残ったり、剥がす際に紙の表面を傷めたりして³³⁾ 有害³⁴⁾ である。メモは、1冊読み終えてから事後にまとめて書こうとしては億劫になるし、どの箇所だったか見失い見つからなくなることも多い。即時に現場で「読みながら気になった箇所をどんどん書き写していく」「本から得られる価値を「自分の“頭のなか”」にため込む」のではなく、「自分の“外”にため込む」³⁵⁾。

3.2 個人蔵書の在庫管理

購入した図書のうち、以下のようなもの以外は、用が済んだら順次手放すことにしている。

- ・ 辞書・事典類のように「使う」ための本
- ・ 確認・引用の必要が反復的に生じる古典
- ・ 特別に関心のある人物の著作
- ・ 繰り返し読みたくなる愛読書

購入する時点では、手元に残す図書となる可能性を期待して買うわけだが、店頭で見ただけでは往々にして判断を誤ることがある。つまり、つまらない本だったことがわかるのは買ってしまった後だったという失敗をなかなか根絶できない。

読んでみた結果、それなりに面白かった、一読の価値はあった、という図書の場合でも、将来再読したくなるだろうか、使用する機会が発生するだろうか、自分ごときがこのままひとりで占有し死蔵しているよりも誰か他の人の手に渡った方が本が活きるのではないか、という判別基準にかけると、大部分は手放すことができ、身軽に暮らせるようになる。「蔵書は一部の学者商売を除いて、それほど必要であるとは思えない。書斎は書物が流れ入りまた流れ去る、澱みのない河川の役割を果せばよいのである。」³⁶⁾

手放す際は、図書館に寄贈したり、古書店へ売却したりする。売却は、単なる故紙として廃棄されるにはしのびないため、引き取り価格には多くを期待しない。

(a) 良書の場合：より多くの人々に読まれることになれば、そのこと自体が有意義

(b) つまらない本の場合：定価で買ってしまう不幸な人が1人でも減るかもしれない

「実は図書館は利用者からの寄贈を全面的に歓迎しているわけではない。本音を言えば、なんでもかんでも持ってこられても困る、というのが図書館側の基本姿勢といってもいいくらい」³⁷⁾だが、リクエストが集中して予約待ち人数の多いベストセラーならば歓迎される。

何を以て「面白い」と感じるかは、非常に個人差が大きい。また、有用／無用も、人それぞれの置かれた立場や状況によって、大いに異なる。自分が「つまらない」と思って手放す本も、他の誰かにとっては面白い、あるいは、有用かもしれない、という可能性を期待してリユース再利用の回路に乗せている。

本は嵩張るので置き場所に窮する³⁸⁾。「図書館は本を“借りられる”だけでなく“返せる”ありがたいところなのです」³⁹⁾。借りた本や読みかけの本はなるべく早く用を済ませて片づけてさっぱりしたい。トランプのババ抜きのように、手札を全部手放して「上がる」と、気分はすっきり爽やかになる。

手元に残すと決めた本を自宅の本棚に並べる際は、まず判型別、次に著者名の50音順⁴⁰⁾にしている。内容や主題から分類しようとすると、排列に一貫性を保つことが不可能で、どこに置いたかわからなくなる。複数の著者による合集や作者不詳の古典は排列位置に迷うが、著者名順の中に編者名で練り込んだり、先頭か末尾にまとめたりしてお茶を濁している。判型は、おおよそ、(a) 文庫、(b) 普通の単行書、(c) 大型本、の3区分としている。収納効率を高めるよう、1枚の棚板を手前と後ろの前後2列に使い、文庫本を手前側に並べている。

同じ著者名の中では、文庫本は出版社によるシリーズ番号順。文庫本以外については、著作の発表年代順または書名の順に排列するが、あまり一貫できていない。

3.3 最良最適の版を選ぶ

今、目の前に1冊の本があるとして、それをいきなり読み始める前に、すべきことがある。奥付の直前のページや後書きを点検し、既読の内容ではないかを確認する。新刊書でも、雑誌の連載で読んだことがあるかもしれない。単行書としては初めて出会った本でも、目録などで検索して別の版がないか確かめる。増補改訂版が存在するならば、たとえ同じ著作を昔買って自宅に既に所有している場合でも、せっかく費やす時間と労力、旧い版よりも最新版を参照したほうが有益な場合が多い。もし、同じ本が書架に複数冊並んでいたら、版が同一でも奥付で刷も確認し、なるべく新しい刷のものを選択する。誤植やその他の内容面でも訂正改善されている可能性を期待できるので。

翻訳書ならば、他の訳者によるものはないか、誤訳の少ないのはどれか、オンライン書店のカスタマーレビューなどの評判も参考に。図書館に行って複数の種類の翻訳を棚から集めてきて、並行して読み較べることもできる。一文ずつとか段落単位で対照しながら進み、徐々に1冊に決めていく、章毎に別々の訳者にリレー式に乗り換えていく、キセル乗車する、最後まで複数種類を並行して読み続ける、原書も併せて参照する、などの方法がある。複数の翻訳を突き合わせると、もとの言語を全く知らなくても誤訳が透けて見えることがある。「日本語を読んでいて

おかしいとおもう部分は、ほとんどすべて誤訳である」⁴¹⁾。

ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』第3部第8篇「ミーチャ」の第7に登場するポーランド人の用心棒は非常に背が高い。各種の日本語訳で「二メートル」や「二メートル半」など50cmも差があるのはおかしい。「『立ちあがったら、十一ヴェルシヨク（「二アルシンと十一ヴェルシヨク」を省略した言い方、約百九十センチ）はあるだろう』」という江川卓訳⁴²⁾が正解⁴³⁾。

「『カラマゾフの兄弟』で、芥川は「一本の葱」の話に注目しなかったのでしょうか」⁴⁴⁾。

同一の著者・書名でも、版によって内容が部分的に差し換えられて異なる場合がある。たとえば、佐々木昭一郎〔台本〕「四季・ユートピアノ」は、『テレビドラマ代表作選集』1981年版。東京：日本放送作家組合，1981，p.105-187や佐々木昭一郎『創るということ』東京：JICC出版局，1982，p.200-313で読めるが、佐々木昭一郎『創るということ』新装増補版。東京：宝島社2006では、「なお「四季・ユートピアノ」のシノプシス及び台本は割愛しました。」(p.254)となっている。

挿絵／イラストの異同にも留意を要する。たとえば、朝日新聞夕刊に1991年3月4日～10月31日連載、6名の画家が曜日毎に挿画を担当した、森瑤子『東京発千夜一夜』上巻；下巻。東京：新潮社，1995（新潮文庫；も-14-5、も-14-6）は、スミコ・デイビス、浅賀行雄、橋本シャーン、太田螢一⁴⁵⁾、飯野和好、田村能里子の挿画を全作収録しているが、森瑤子『東京発千夜一夜』東京：朝日新聞社，1992はほんの少しだけしか、森瑤子『東京発千夜一夜』上；下。東京：朝日新聞社，1996（朝日文芸文庫）には全然、挿画を掲載していない。一般的には、連載時の挿絵／イラストは単行書には収録されないのが通例だが、図書館では、雑誌や新聞のバックナンバーを読むこともできる。

3.4 旬のものを旬のときに読む

読めもしない本をむやみに買い込んで積読⁴⁶⁾のまま放置している間に、より良い版が刊行され内容面で凌駕される可能性がある。本は食品と違って腐るものではないから、買おうかどうかと迷ったときはとりあえず買っておけ、という意見もしばしば見聞きする。けれども缶詰、レトルト、冷凍食品にも賞味期限はある。手持ちの積読本が旧版だったならば、かえって手かせ足かせ邪魔になる。また、モノとしての書籍も、腐るものではないどころか、油断しているとカビが生えるし⁴⁷⁾ 虫も湧く⁴⁸⁾ ⁴⁹⁾。紫外線⁵⁰⁾・高温多湿を避け風通しの良い涼しい場所で保管すること⁵¹⁾。

冷蔵庫に食品を詰め込み過ぎると、冷却効率が落ちるのみならず、中身が把握しにくくなり、賞味期限を過ぎたり腐らせたりしてしまいがち。図書も同様で、用の済んだ本までなんでもかんでも手元にとっておくと、手持ち在庫の見晴らしが悪くなる。要らないガラクタに埋もれて、必要なものがすぐに取り出せなかったり見つからなくなったりする。今現在の自分が無理なく消化吸収できるだけの必要量をその都度採ってきて、新鮮なところを選んで旬のものを旬のときに残さず食べ切って食品ロスを抑止する。

飲食物の好き嫌いと同次元で偏食なので私は、古今東西の名著／古典も、今どきのベストセラー⁵²⁾も、その圧倒的大多数は興味関心を持つことができず、そもそも読めない。けれどもこ

の世に存在する著作の総量母集合が無限⁵³⁾に膨大であるおかげで、読むべき本が尽きることはない。ほんのひとつのテーマに限った場合ですら、いくら時間があっても読み尽くすことは不可能である。

著者が列挙している参考文献⁵⁴⁾は一般にどの程度実際に読まれているだろうか。精読主義の人々ですら、興味を引くものを選択的に読む程度で済ませているのが通例ではなかろうか。作品自体を純粹に単体で読むよりも（明示的に参考文献や註として記載されているものに限らず）引用／言及されているさまざまな著作⁵⁵⁾の出典を探して読む寄り道の愉しみがある⁵⁶⁾。個々の著作は単独で孤立的に完結しているのではなく、古典作品の場合に顕著のように、それを読んだ別の誰かが書いたコメントや、著者が下敷きにした先行作品や、後世の翻案も含めて考えれば、ひとつの作品にまつわるテキストは未来永劫に増殖し続けていく。翻案作品と原拠を読み較べることは至福である⁵⁷⁾。

2024年発行予定の紙幣のうち新一万円券の肖像は渋沢栄一であると財務省が発表した2019年4月9日を契機に私は、にわか渋沢ファンになった。渋沢栄一伝記資料⁵⁸⁾をはじめ膨大な文献⁵⁹⁾が以前からあったところへ加えて新刊が続々と出版される。とうてい読み切れない。ひとりの人間が一生の間に読むことのできる本の量は、どんな大量読書家でも日頃本を読まない人でも、無限に対する僅少という比率に過ぎないという点では、同然である。量を誇っても速度を競っても無益である。

どんな本を「面白い」と感じるかは、好き嫌いや趣味嗜好だけではなく、読者ひとりひとりがそれぞれの時点で持ち合わせている予備知識の量と質、時と共に移ろいゆく各自の興味関心の所在や、気分や体調、健康状態によっても大いに変化していく。

「ある日『吾輩は猫である』をまた読んでみたら、今度は父も大変面白がって、」「中に出てくる外国人やギリシャの話などを熱心に質問してくる。」「それにしても七十台のとき「猫」をつまらなかつた父が、九十台を越してこう面白がる。」⁶⁰⁾

あるいは、自分を取り巻く世界が一変したことによって、それまでは読んだこともなかったテーマ／ジャンルの本が、にわかに興味関心を引くこともある。ダニエル・デフォーの『ペスト』を私は、コロナ禍がなかったならば手に取ることもなく、たとえ読んだとしても遠い異国の、しかも何百年も昔の話、としか感じられなかったに違いない。アレックス・マンゾーニの『いいなづけ』は、ペストが侵入する第31章以降だけを読んだ⁶¹⁾。雑誌・新聞の連載や学校の授業で断章だけ講読するのと同様に、単行書も中途から読み始めることができる。

「本は物質的に完結したふりをしている」⁶²⁾ので、最初から最後まで通読しなければならないかのように思わせがちである。けれども、通読するにはつらいけれども斜め読み・拾い読みするぶんにはじゅうぶん面白くて役に立つ本も多い。通読主義は、皮⁶³⁾・骨・頭まで食べないと鯖を本当に全部読んだことにならないと主張するようなもの。

3.5 古典には注釈や解説が必要

ゲーテ『ファウスト』は、「難解な詩のような言葉の羅列で、何やら意味不明。辟易して途中

で放り出してしまい、残ったのは挫折感と、おのれの教養のなさへの無念の思い」⁶⁴⁾。ところが、ファウストをめぐって⁶⁵⁾ いろいろな人が書いたさまざまな文章をあちらこちらと拾い読みしたり翻案作品を読み較べたりして何層にも塗り重ねていくと、やがて徐々に星座のような繋がりが見えてくる。星座が、星と星を繋ぐ線が宇宙空間に物理的に実在するわけではなく、見る側が主観を投影してイメージを看て取るものであると同様に、読書も、この人の書いたこの作品とあの人の書いたあの作品との間の繋がりは客観的にあらかじめ実在しているわけではなく、読者が各人各様に主観を投影して初めて生成されるものである。

ざるのような頭で本を読んでいる。けれども別の本を読んでいる間にいつしか、ざるの目が詰んできて、以前は底の抜けた柄杓で水を汲むようにこぼれ落ちるばかりだった部分が、ざるの中に残るようになってくる場合がある。ときには砂金も採れるかもしれない。

ヨーロッパの古代中世の視覚理論には、「物がなぜ見えるのか」という疑問に対して、ある種の線または力（視覚線）が観察者の眼から外へ送り出され、それが見られる物体を「まさぐる」ことにより視覚を生じると説く「外送理論」があったそうである⁶⁶⁾。読書も、読者各自がどのような「視覚の火」を放出するかに応じて、人それぞれに異なったものが見えるのみならず、同一人物が同じものを読んでさえ、時を経るとまた違ったものが見えてくる。ボイオティアの大山猫⁶⁷⁾のように鋭い眼光を発する者には、常人とはずいぶん違った光景が見えてしまう。

3.6 無理して読む必要はない

贈り物に本を選ぶことはとても難易度が高い。よほど親しいか良く知っている相手でなければ、趣味嗜好とかけ離れたものを贈ってしまったり⁶⁸⁾、逆にとっくの昔から持っていた本と重複して無用だったりするおそれがある。特上寿司を奮発してご馳走しているつもりが、相手は生の魚介類は苦手で食べられない人かもしれない。本を読む習慣のない人は、本を贈られてもどうせ読まないのではないか。日頃から本を読んでいる人は自分の読みたい本は自分で選択できるし、ただでさえ積読の山を抱えているところへ興味もない本を新たにプレゼントされても迷惑なだけかもしれない。

好き嫌いせずに何でも食べなくてはいけない、大きくなれないよ、と子供に強要するのはありがちなことだが、世間でどんなに名作・傑作という評判でも、無理して読む必要はない。「読んでいて面白くない本もたしかにあります。」⁶⁹⁾。「『おもしろい本』というのは、人によってずいぶんちがうことがあるものです」⁷⁰⁾。「『源氏物語』を読み通した人いますか」⁷¹⁾。「漱石がなぜ『源氏物語』を読まなかったのか」「五十四帖をきちんと読み通した人は日本人でも存外少ない」⁷²⁾。「プリニウスも「いかに悪い書物であろうと、何かよいところのない書物はない」と申しているのも、この辺のところを指したのでございます」「人の好みと申すものは、すべて一様ではございません」⁷³⁾。

『西遊記』のような長大な古典の場合、たいていの人は子供向けの再話や演劇、ドラマなどを通じてあらすじや登場人物についてながしかのことは知っているが、原典をいきなり読んでも冗長で、通読する人は稀である⁷⁴⁾。ガイドブックや研究者による解説などを先に読み、「他人に

ものを考えてもらうこと」⁷⁵⁾こそが、我々一般読者の正しい読書法である。

高名な文学者が誤読や勘違いで不正確／いいかげんなことを述べ、出版社の編集者もそれをチェックする責務役割を果たしていない事例がときおりある。ツルゲーネフは「ドン キホーテは殆ど読み書きができません。ハムレットは多分日記をつけております。」⁷⁶⁾と述べた。『ドン・キホーテ』^{77) 78)}の狂気の原因は「読書三昧がたたって脳味噌がからからに干からび、ついには正気を失ってしまった」⁷⁹⁾ことであり、主人公は読み書きができないどころか、才知あふるる博識の教養人である。

本をたくさん読んでいっしょうけんめい勉強しても必ずしも立派な人間になれるとは限らない。「ヒトラー、スターリンの共通点は少なくないが、一つだけ強調したいのは、両者ともに独学であり大の読書家で、並みの知識人の分類に入らないことだ」⁸⁰⁾。「ヒトラーの読書は余暇とか楽しみとかとはまったく無縁のものだった。それは「死ぬほど真剣な仕事」だった」⁸¹⁾。「エカテリーナ二世からウラジーミル・ブーチンに至るロシア歴代の支配者の中で、スターリンが最大の読書家だったと言っても過言ではない。」⁸²⁾

3.7 読書記録で重複チェック

書店や図書館で、目の前にある本が、既に読んだことがあるのかないか、見分けがつかないことがしばしばある。コミックスや巻数の多い長大な作品などを第何巻まで所有しているか／読んだか覚えていられない。同じ著者の本を何冊もまとめて読んでいた場合など、題名を見て既読か未読か思い出せないのみならず、中身をパラパラと読んでみても定かには判別できない。読んだことがあるような気がするの、実際に以前に同じ文章を読んだことがあるためなのか、それとも単に、他の本に書かれていた主張やエピソードが別のこの本でも繰り返されているための既読感なのか。

「それにしてもみんな一回しか読んでない小説よく覚えてるよな。」⁸³⁾

記憶は頼りにならないので、読書記録を作成している。ミスコピーの裏紙など（無限の量が手軽に入手できる資材）をA6判（郵便葉書よりも少しだけ大きい）に裁断したカード（A4判の反故紙1枚から4枚採れる）を、人名による見出しの50音順に並べている。ファイルキャビネットや収納ボックスのような専用の什器／家具は使用していない。ありあわせの袋⁸⁴⁾（透明ポリ袋の類）に適宜の量を入れて、文庫本サイズの形状にして住居の普通の本棚に配架している⁸⁵⁾。

単なる教養娯楽のために本を読んでいる。血肉になどしたくない。自己啓発、試験勉強、年収アップのために要約や感想を書くのではない。既読か未読かを判別できるようにしておくためのチェックリストである。正確な書誌事項、書店あるいは図書館の名称、入手日付等の客観的データを一覧性の高いコンパクトな形式で記録する。なんらかの本を入手した都度、作業を後回しにせず直ちに記録しておく。

1枚のカードにひとりの人物を充て、著作物等の情報を自分が出会った日付順に列挙し記述する。複数のペンネームや姓の変更に対しては名寄せする。生没日付がわかれば付記しておき、同名異人や同姓同名を区別する。人物情報の索引カードである。見出し語の対象として翻訳者も立

項している。未知の著者の作品を手にとった際、この人の訳したものならば、と（自分にとって）面白い可能性が高いかどうかの予測判断材料にもなる。ルーズリーフのメモ書きノートの紙葉を折り畳んだものや、通信／書簡等をカードと一緒に混配することもできる。

読んだ本だけを記録していたのでは、（積読本などの）重複購入⁸⁶⁾を回避するには不十分である。むしろ、読んでいない本⁸⁷⁾こそ、記録しておく意義／価値があり実際に役に立つ。これから読む（かもしれない）本、読みかけて中途放棄した本、今はまだ自分にとって機が熟していないけれども後日もっと時が経過したら読むかもしれない本など。つまらなかった本を記録しておくことは、あとでうっかり同じ著者の、同様につまらない本を掴んでしまわないためにも有効である。

必要な部分だけを拾い読みして次へ移ることが多いので、物理的な図書の1冊毎を記録の単位としていては不足である。「最初から最後まで読む本は、数十冊に1冊くらいしかありません」⁸⁸⁾。一部分だけ読んだ本も、読んだ箇所をカードに分出記録⁸⁹⁾しておく。図書に限らず、雑誌や新聞の記事のほか、テレビやラジオに著者が出演した、ドラマや映画の原作として使用された、あるいは、その人物がテーマとしてとりあげられた、といったことについても、自分が遭遇した日時の順に列記している。そうでもしないと（そうしてさえも）いつごろ何をきっかけにその人物に関心を持ち、読むようになったのか忘れてしまう。また、人名自体を思い出せない（もともと暗記するつもりもない）ので、日誌的なメモのノートを併用してカードを補助している。

音楽作品の情報^{90) 91)}もこのカードで管理している。実を言うと私がカードによる情報管理を開始した出発点は録音テープの索引の必要からだった。読書記録を付け始めたのは遅れ馳せにその後何年も経ってからである。かつては、番組情報誌を毎号購読しラジオFM放送からカセットテープに録音していた。索引カードの維持更新は、同一内容の重複を回避するためにも必要不可欠だった。自宅のカセットデッキが寿命で壊れた後、ノイズリダクション^{92) 93)}をサポートする後継機もなく、もはやテープも全部まとめて廃棄し、エアチェックもしなくなってから久しい。けれども現在でも引き続き、自分の遭遇した放送や実演から情報を記録し続けている。維持更新の手間暇と自分個人にとっての有用性との対努力効果のバランスにより選択的に記録している。

読書記録でも人名のカナ表記や外国語の扱い^{94) 95)}に留意すべき事項がある。「異なる言語で標記された作品が実は同じ作品の異なる呼称であるというケースが音楽メディアには多い」⁹⁶⁾。さまざまな不統一なかたちで表記されている標題を作品表で識別同定し典拠コントロール⁹⁷⁾する。

「過去の巨匠の作品を何度も何度も録音するのが常であるクラシックレコード業界」⁹⁸⁾だが、何種類もの音盤が既に市販され流通している名曲に更に新録音を増やすよりも、その労力・手間暇・コストのせめて何分の一かでも、現代の新作⁹⁹⁾や知られざる埋もれた作品の方に充ててほしい。同様に文芸作品も、既に翻訳が何種類もある作品に新訳を加えるエネルギーを、「これまで日本で出版された作品はできるだけのごき、日本であまり知られていない短編、あるいは入手困難な作品を中心に収録すること」¹⁰⁰⁾、本邦初訳の方に振り向けるよう希望する。

4. おわりに

ある著作に対して、読む前に／読みながら／読んだ後に作業するよう推奨したい事項を以下にあらためて列挙しておく。そのために必要十分な情報を利用者に提供するよう目録を整備する。図書館が担うべき使命役割は大きい。

- ・ どのような版がこの世に存在するかをまず検索し、内容の差し替え異同、挿図／イラストの有無も必要に応じて確認する
- ・ 現在の自分にとって最良最適のバージョンはどれなのかを予測判別する
- ・ 「読書」の対象は1冊の本という書籍の形態に限定せず、雑誌やウェブサイトも含めて入手先を探索する
- ・ 図書に線引き書き込みだけでも、どの本だったかを忘れてしまい思い出せず参照箇所がみつからなくなる
- ・ 自分の備忘索引用に客観的な事項のメモを記録し、既読／未読の判別ができるように対策しておく
- ・ ひとつの同じ著作物がさまざまな標題で刊行される場合があるので、書誌的来歴、原題なども日頃から記録しておき所蔵調査にも活かす
- ・ 過剰在庫を手元に貯め込まず、自身の処理能力の範囲内で無駄なく消化吸収できるだけ分量を必要の都度採ってきて、旬のものを旬のときに読む

〔注〕

- 1) しりあがり寿「地球防衛家のヒトビト」『朝日新聞』2020年12月16日 水曜日 夕刊, p.8.
- 2) 野口悠紀雄『「超」整理法：情報検索と発想の新システム』東京：中央公論社, 1993（中公新書；1159）, p.45.
- 3) キングジムファイリング研究室『キングジム人も組織もうまくまわりだす超整理術 2133：“オフィスのプロ”だけが知っている』東京：KADOKAWA, 2019, p.51.
- 4) おがたちえ著；みなみ協力『汚部屋掃除人が語る命が危ない部屋』東京：竹書房, 2019（Bamboo essay selection）.
- 5) 笹井恵里子『潜入・ゴミ屋敷：孤立社会が生む新しい病』東京：中央公論新社, 2021（中公新書ラクレ；733）.
- 6) 野口靖夫『ファイリングと書類整理の上手なやり方』東京：日本実業出版社, 1986, p.102.
- 7) 野口靖夫『ファイリングがわかる事典：読みこなし・使いこなし・活用自在』東京：日本実業出版社, 1995, p.132.
- 8) 三橋志津子『整理がうまい人の習慣術：この「7つの絶対ルール」だけであなたの仕事力は飛躍的にアップする！』東京：河出書房新社, 2005（KAWADE 夢新書）, p.24-25.
- 9) 石川秀人『最新5Sの基本と実践がよ〜くわかる本：整理（Seiri） 整頓（Seiton） 清掃（Seisou） 清潔（Seiketsu） 躰（Sitsuke）：5S導入・定着のための実践プログラム』第2版. 東京：秀和システム, 2019（How-nual 図解入門. ビジネス）, p.37.
- 10) 鈴木真理子『絶対に片づく整理術：ミスがなくなり、仕事が速くなる』京都：PHP 研究所, 2015, p.22.
- 11) OJT ソリューションズ著『トヨタ仕事の基本大全』東京：KADOKAWA, 2015, p.180.
- 12) 作山宗久著『文書のライフサイクル』東京：法政大学出版局, 1995, p.110.
- 13) 藤井美保代『「ミスゼロ仕事」の片づけ・整理術：ミスなく、効率良く！今日から使える55の小ワザ』東京：日本能率協会マネジメントセンター, 2014, p.74.
- 14) 村上由美『ちょっとしたことでうまくいく発達障害の人が上手に暮らすための本』東京：翔泳社, 2018, p.91.

- 15) 池田暁子『必要なものがスグに！とり出せる整理術！』東京：メディアファクトリー, 2008, p.98-99.
- 16) 小松易『「かたづけ思考」こそ最強の問題解決』東京：PHP 研究所, 2018, p.82.
- 17) コピーした論文や資料の整理方法 <https://sengoku-period.com/2019/03/06/filing/>
集めた資料の整理方法 <https://sengoku-period.com/tag/ファスナーケース> (参照 2021-10-25).
- 18) 読書猿『独学大全：絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための55の技法』東京：ダイヤモンド社, 2020, p.514-515.
- 19) 川辺秀美『カリスマ編集者の「読む技術」』東京：洋泉社, 2009 (新書 y; 208), p.43.
- 20) 鷺田小彌太『シニアの読書生活』東京：文芸社, 2013 (文芸社文庫), p.65.
- 21) 諸橋孝一『図書館で考える道徳：書き込み被害をめぐって』東京：鳥影社, 2001, p.15-16.
- 22) 林哲也「本の修理と保存 (特集 Re-Library)」『病院図書館』27 (3), p.113-116 (2007.3) より p.115.
<http://hdl.handle.net/11665/1179>
- 23) Dain『わたしが知らないスゴ本は、きっとあなたが読んでいます』東京：技術評論社, 2020, p.56.
- 24) お風呂で本を読む人が理解できません。(Yahoo!知恵袋) https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13136823763 (参照 2021-10-25).
- 25) 施川ユウキ「29冊目 おフロ読書」『バーナード嬢曰く。』2. 東京：一迅社, 2015 (Rex comics), p.115-120.
- 26) 山口謡司『知的社会人1年目の本の読み方』東京：フォレスト出版, 2017, p.87.
- 27) 風呂派 vs トイレ派 (新潮文庫メール アーカイブス)
<https://www.shinchosha.co.jp/bunko/blog/2012/04/20.html> (参照 2021-10-25).
- 28) 林哲也「本の読み方をめぐって：線引き書き込みについて考える」『実践女子大学短期大学部紀要』36, p.57-61 (2015.3). <http://id.nii.ac.jp/1157/00001330>
- 29) 立花隆『「知」のソフトウェア』東京：講談社, 1984 (講談社現代新書; 722), p.51-52.
- 30) 橋口侯之介『知和本入門：千年生きる書物の世界』東京：平凡社, 2011 (平凡社ライブラリー; 744), p.252.
- 31) 池澤夏樹『知の仕事術』東京：集英社インターナショナル, 集英社 (発売), 2017 (インターナショナル新書; 001), p.109.
- 32) 北村薫「本に書き込みをしない (嗜好と文化：第79回)」(2017.10.9)
<https://mainichi.jp/sp/shikou/79/01.html> (参照 2021-10-25).
- 33) 図書館の本に付箋を貼ったらこんなことに。神奈川県立図書館が「恐怖の写真」で訴え
https://www.huffingtonpost.jp/2018/06/25/fusen_a_23467796/ (参照 2021-10-25).
- 34) ポスト・イットを本に貼り付けるときの3つの注意点
<https://www.itmedia.co.jp/bizid/articles/0707/20/news051.html> (参照 2021-10-25).
- 35) 印南敦史『遅読家のための読書術：情報洪水でも疲れない「フロー・リーディング」の習慣』東京：ダイヤモンド社, 2016, p.82, p.143.
印南敦史『遅読家のための読書術：情報洪水でも疲れない「フロー・リーディング」の習慣』東京：PHP 研究所, 2021 (PHP 文庫; [い103-1]), p.92, p.157.
- 36) 谷沢永一『論より証拠：谷沢永一の読書術』東京：潮出版社, 1985, p.96.
- 37) 岡崎武志『読書の腕前』東京：光文社, 2007 (光文社新書; 294), p.115-116.
- 38) 赤田順一郎『蔵書一代：なぜ蔵書は増え、そして散逸するのか』京都：松籟社, 2017.
- 39) 赤木かん子『子どもを本嫌いにならない本』東京：大修館書店, 2014, p.10.
- 40) 川本武著：津藤文生, 大橋弘撮影「上野千鶴子の本棚：自慢の本棚なんです、著者名が頭に浮かばず、探し回ります。」『本棚が見たい！』2. 東京：ダイヤモンド社, 1996, p.14-15 写真, p.37-40 本文.
- 41) 水田洋『読書術』東京：講談社, 1982 (講談社現代新書; 665), p.151.
- 42) ドストエフスキー：江川卓訳『カラマゾフの兄弟』2. 東京：集英社, 1979 (世界文学全集; 46), p.73.
- 43) 鈴木淳一, 岡部由佳, 小林慎吾, 村松多恵子 [訳]「フェドシユーク『古典作家の難解なところあるいは19世紀ロシアの生活百科』(その4)」『文化と言語：札幌大学外国語学部紀要』63, p.151-175 (2005.10).
<http://id.nii.ac.jp/1067/00003247/>
- 44) 太田丈太郎「十九世紀ロシア文学と日本近代文学：芥川龍之介の場合」『「ロシア・モダニズム」を生きる：日本とロシア、コトバとヒトのネットワーク』横浜：成文社, 2014, p.60-88; 註 p.405-407より p.85.
<http://www.oota-keitle.com/works/morisan/tokyo.html> (参照 2021-10-25).
- 45) 永田希『積読こそが完全な読書術である』東京：イースト・プレス, 2020.
- 47) 鎌田浩毅『理科系の読書術：インプットからアウトプットまでの28のヒント』東京：中央公論新社, 2018 (中公新書; 2480), p.190-191.
- 48) 本棚の防虫・防カビ対策 今すぐ始めて大切な本を守ろう! (ブックオフオンラインコラム) <http://pro.bookoffonline.co.jp/book-enjoy/book-hokan/20180413-bouchu-boukabi-taisaku.html> (参照 2021-10-25).
- 49) 佐藤亮介「紙類が多くて溢れた家はダニ、ゴキブリ、カビ、ネズミが大量発生・繁殖してしまう理由」
<https://failingman.com/kami-boutyu/> (参照 2021-10-25).
- 50) 有名建築家のビル、公共施設「使い勝手は最悪」。アート先行の問題点とは
<https://nikkan-spa.jp/1757303/3> (参照 2021-10-25).
- 51) 藤野こと監修「読まなくなった絵本も収納・保管方法をしっかりすれば絵本は保存可能」

- <https://www.trunk.services/column/posts/221> (参照 2021-10-25).
- 52) 斎藤美奈子『趣味は読書。』東京：筑摩書房，2007（ちくま文庫）。
 - 53) 柘植文「その49 果てしなき世界」『野田ともうします。』2. 東京：講談社，2010（ワイドKC；689），p.93-96.
 - 54) 林哲也「参照文献はなぜ必要か」『一橋大学附属図書館研究開発年報』8, p.8-02-1～8-02-20（2020.3）.
<https://doi.org/10.15057/31229>
 - 55) 井筒三郎、柳沼聡一郎企画・執筆『レトリックの本：文章と発想の技術』東京：JICC 出版局，1981（別冊宝島；25）。
 - 56) 一橋大学附属図書館「『TZ〈ほんの窓〉」高本善四郎氏助成図書コーナー小展示解説リーフレット」
<https://www.lib.hit-u.ac.jp/about/reading/tz/>（参照 2021-10-25）
第38号（2016.3.1）『ドン・キホーテ』は本当に面白い？
https://www.lib.hit-u.ac.jp/images/2019/12/tz_038.pdf
第40号（2016.6.1）『吾輩は猫である』../tz_040.pdf
第42号（2016.11.7）菊池・直木・芥川：知られざる文豪たちを読んでみる ../tz_042.pdf
第45号（2017.7.18）ニーチェと音楽 ../tz_045.pdf
 - 57) 小泉八雲著；平川祐弘編『怪談・奇談』東京：講談社，1990（講談社学術文庫；[930]）。
 - 58) 渋沢青淵記念財団竜門社編纂『澁澤栄一傳記資料』第1巻-第58巻；別巻第1-第10. 東京：渋沢栄一伝記資料刊行会，1955-1971. デジタル版『渋沢栄一伝記資料』 <https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/>（参照 2021-10-25）。
 - 59) 一橋大学附属図書館「渋沢栄一（1840-1931）（本学関係人物文献リスト）」
https://www.lib.hit-u.ac.jp/retrieval/collections_bunken/bunken/shibusawa-eiichi/（参照 2021-10-25）。
 - 60) 渋沢秀雄『父渋沢栄一』東京：実業之日本社，2020（実業之日本社文庫；し7-1），p.425.
 - 61) A・マンゾーニ；平川祐弘訳『いいなづけ：17世紀ミラーノの物語』下. 東京：河出書房新社，2006（河出文庫；[マ5-3]），p.106以降。
 - 62) 管啓次郎「本は読めないものだから心配するな」『本は読めないものだから心配するな』東京：左右社，2009，p.3-10より p.9.
管啓次郎『本は読めないものだから心配するな』東京：筑摩書房，2021（ちくま文庫；[す-28-1]），p.14.
 - 63) 焼き魚の皮を食べるべきか否か？どちらが正しいかを調査したら意外な事実が判明！ <https://precious.jp/articles/-/8667>（参照 2021-10-25）。
 - 64) 中野和朗『史上最高に面白いファウスト』東京：文藝春秋，2016，p.2.
 - 65) 長谷川勉『魔術師ファウストの転生』東京：東京書籍，1983.
 - 66) 市場泰男「物はなぜ見えるのか：古代中世の視覚論争」『夢か科学か妄説か：古代中世の自然観』東京：平凡社，1987（平凡社・自然叢書；4），p.85-106より p.86，p.88，p.101.
 - 67) 鶴野昭彦「夢の男」『テレビドラマ代表作選集』1991年版. 東京：日本放送作家組合，1991，p.199-228より p.217.
 - 68) 私は本をよく読むので、お姑さんがよく本を貸して下さい。(OKWAVE)
<https://okwave.jp/qa/q6198149.html>（参照 2021-10-25）。
 - 69) 京極夏彦『「おばけ」と「ことば」のあやしいはなし：京極夏彦講演集』東京：文藝春秋，2021，p.277.
 - 70) 板倉聖宣「科学読物の読み方」. 板倉聖宣，名倉弘『科学の本の読み方すすめ方』東京：仮説社，1993，p.10-24より p.12.
 - 71) 平川祐弘『日本語で生きる幸福』東京：河出書房新社，2014，p.235.
 - 72) 平川祐弘『内と外からの夏目漱石』東京：河出書房新社，2012，p.490.
 - 73) 会田由訳『ラサリリヨ・デ・トルメスの生涯』第5刷改版. 東京：岩波書店，1972（岩波文庫，赤720-1），p.3.
 - 74) 武田雅哉『猪八戒の大冒険：もの言うブタの怪物誌』東京：三省堂，1995，p.5-6.
 - 75) ショウペンハウエル著；斎藤忍随訳「読書について」『読書について：他二篇』第26刷改版. 東京：岩波書店，1983（岩波文庫；青（33）-632-2），p.127-147より p.127.
 - 76) ツルゲーネフ著；河野與一訳「ハムレットとドン・キホーテ」. 河野與一，柴田治三郎訳『ハムレットとドン・キホーテ：他二篇』東京：岩波書店，1955（岩波文庫；[赤（32）-608-8，赤-859]），p.5-35より p.29.
 - 77) 牛島信明『「ドン・キホーテ」は日本人にとって本当におもしろいか』『反＝ドン・キホーテ論：セルバンテスの方法を求めて』東京：弘文堂，1989，p.5-17.
 - 78) 清水憲男『ドン・キホーテの世紀：スペイン黄金時代を読む』東京：岩波書店，1990.
 - 79) セルバンテス作；牛島信明訳『ドン・キホーテ』前篇1. 東京：岩波書店，2001（岩波文庫；赤721-1），第1章より p.46.
 - 80) ノーマン・M・ネイマーク；根岸隆夫訳『スターリンのジェノサイド』東京：みすず書房，2012，p.161.
 - 81) ティモシー・ライバック；赤根洋子訳『ヒトラーの秘密図書館』東京：文藝春秋，2012（文春文庫；[ラ-8-1]），p.215.
 - 82) サイモン・セバーク・モンテフィオーリ；染谷徹訳『スターリン：赤い皇帝と廷臣たち』上. 東京：白水社，2010，p.188.
 - 83) 清水義範，西原理恵子『独断流「読書」必勝法』東京：講談社，2009（講談社文庫），p.55.

- 84) 森鉄三「思ひ出すことども」『森鉄三著作集』続編第15巻「雑纂三」. 東京：中央公論社, 1995, p.9-145より p.9-10.
- 85) 林哲也「文書管理の試行錯誤：事務職員の立場から」『情報管理』40 (2), p.150-156 (1997.5)より p.155.
<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.40.150>
- 86) いいひさいち「ののちゃん」5462『朝日新聞』2012年12月1日 土曜日, p.39.
いいひさいち「ののちゃん」6178『朝日新聞』2014年12月7日 日曜日, p.38.
「いいひさいち・ののちゃん」Part14 113~117, Part16 51
<https://kohada.5ch.net/test/read.cgi/comic/1352531208/>
<https://karma.5ch.net/test/read.cgi/comic/1417002068/> (参照 2021-10-25).
- 87) ピエール・バイヤール著；大浦康介訳『読んでいない本について堂々と語る方法』東京：筑摩書房, 2016 (ちくま学芸文庫；[ハ-46-1]).
- 88) 奥野宣之『図書館「超」活用術：最高の「知的空間」で、本物の思考力を身につける』東京：朝日新聞出版, 2016, p.141.
- 89) <https://kotobank.jp/word/分出記録> (参照 2021-10-25).
- 90) 松浦淳子, 松下鈞「音楽資料の目録作成上の留意点 (図書館員のためのステップアップ専門講座 第6回)」『図書館雑誌』91 (10), p.858-861 (1997.10).
- 91) 清水常良『みみづく通信：1982-1993：視聴覚アート・見たり聞いたり』東京：石川喜一, 山内恒人, アカデミア・ミュージック (発売), 2003.
- 92) 森芳久, 君塚雅憲, 亀川徹著『音響技術史：音の記録の歴史』東京：東京藝術大学出版会, 2011 (MCE books), p.92.
- 93) 西村祐輝「ドルビーノイズリダクションの使い方&タイプ別の特徴」
<https://nishimurasound.jp/blog/archives/3294> (参照 2021-10-25).
- 94) 林哲也「語学マニュアルの拡充に向けて：辞書の引き方を例として」『現代の図書館』32 (2), p.148-153 (1994.6). <http://hdl.handle.net/10086/18607>
- 95) 林哲也「技術的知識としての実用語学：翻字とタイ語早見表を例として」『大学図書館研究』44, p.40-49 (1994.8). <https://doi.org/10.20722/jcul.359>
- 96) 松下鈞「音楽メディアのドキュメンテーションにおける問題点 (＜特集＞音楽・映像ドキュメンテーション)」『情報の科学と技術』49 (3), p.100-105 (1999.3)より p.102. https://doi.org/10.18919/jkg.49.3_100
- 97) <https://kotobank.jp/word/典拠コントロール> (参照 2021-10-25).
- 98) 上野耕路「マルティヌー：一チェコスロヴァキア人作曲家と彼の国のレコード・レーベル」『美術手帖』41 (609), p.236-237 (1989.5).
- 99) 清水常良「日本人作品「拒否」と“受容”の条件：聴衆にとって日本人作品とは (特集 日本の創作管弦楽曲とオーケストラ)」『音楽芸術』41 (1), p.48-51 (1983.1).
- 100) H. C. Лесков; 岩浅武久訳『左利き』横浜：群像社, 2020 (ロシア名作ライブラリー；14. レスコフ作品集；1), p.217.